

## 第30回 現代世界の地誌的考察

## ■■ 現代世界の諸地域編 ■■

## 世界のさまざまな地域を見てみよう

～南アジア～

監修・講師

友澤和夫

## 学習のねらい

南アジアは、インドとそれを取り囲む5つの国からなる。インドには、13億人以上の人々が日本の約9倍の面積にあたる広い国土に住んでいる。そこには多様な自然環境が展開しており、文化や生活の多様性の基盤となっている。言語や宗教も多岐にわたり、伝統的な社会制度や価値観も根強く残っている。その一方で、近年の経済成長には目を見張るものがあり、都市部を中心に就業や生活が大きく変わりつつある。今回は、自然環境の多様性とヒンドゥー社会の特徴、農業と農村の変化、発展する産業、の3つをテーマに、この地域を地誌的に学習する。

## 今回のポイント

- 南アジアの自然・歩みとヒンドゥー教
- インドの農業と農村の変化
- 発展するインドの産業

## ■■ 南アジアの自然・歩みとヒンドゥー教 ■■

南アジアには、多様な自然環境が展開している。地形的には、急峻なヒマラヤ山脈、肥沃なヒンドスタン平原、台地状のインド半島部の3つに区分され、そこに熱帯から寒帯に至る気候帯が分布している。とくに、世界一の多雨地帯がある一方で、砂漠もみられる点は、南アジアの自然環境の多様性を象徴している。南アジアの人々は、こうした自然環境に適応しつつ、伝統的な文化や価値観を育んできた。インドでは、国民の約8割が信仰するヒンドゥー教が重要である。ヒンドゥー社会は、古くからバラモン・クシャトリア・ヴァイシャ・シュードラという4つの身分（ヴァルナ）と、その下に位置づけられるダリットからなっていた。ヒンドゥー教徒は、生まれながらにヴァルナによる身分をもち、ジャーティという職業を同じくする集団に属している。人々は、ジャーティとして代々世襲してきた職業に従事することが多く、婚姻もその集団内で繰り返されてきた。このヴァルナとジャーティを合わせたインド特有の社会制度がカースト制である。今日では、カースト制による差別は憲法で禁止され、大学の入学定員や議会の議席における割り当てなどを通じて、後進階級の人々の地位向上が図られている。

## ■■ インドの農業と農村の変化 ■■

インドの農業は自然環境に適応する形で展開しており、北インドでは小麦が、南インドでは米が穀物生産の中心となってきた。食生活もこれに対応して北インドではナンやチャパティなどのパンが、南インドでは米が、カレーとともに食されることが多い。1960年代から進めら

れた「緑の革命」によって、米や小麦の生産性は著しい向上をみせ、いずれも中国に次いで世界第2位の生産量を誇っている。近年では、経済成長とともに「白い革命」や「ピンク革命」も進展している。白い革命はミルクの、そしてピンク革命は肉類の生産と消費の増加を指している。ピンク革命で注目されるのは鶏肉である。インドでは肉類に関する禁忌があり、ヒンドゥー教徒は牛肉を食べず、ムスリムは豚肉を口にしない。したがって、多くの人々が共通に食することができる肉が鶏肉なのである。都市近郊の農村部では、ブロイラー養鶏業を営む農家が増えている。インドの経済成長の恩恵は、都市部に比べると緩やかではあるが農村にも及んでおり、社会的な変化も生じている。特に就学率や識字率の上昇が注目される。これには、政府によって無償で提供される学校給食も大きな役割を果たしている。

### ■■ 発展するインドの産業 ■■

近年のインドの経済発展は著しく、年率で5%以上の経済成長が続いている。中国や東南アジアでは経済成長を製造業が牽引しているが、インドではサービス業、なかでもICT産業がそれを支えている点に特徴がある。インドのICTサービス輸出は、アメリカ合衆国を上回って世界第1位の座にある。ICT産業の成長要因のひとつに、英語が使える数学的能力にも秀でたICTエンジニアを安価で大量に確保できたことが挙げられる。インドは独立直後から頭脳立国を目指して教育に力を入れてきたが、ICT産業の発展となって現在花開いているのである。製造業の中では自動車産業の発展が目覚ましく、自動車は現在世界第5位、自動二輪車は第1位の生産台数を誇る。こうした新しい産業のエンジニアは、伝統的なジャーティにはない新しい職業であり実力があれば誰でも就くことができる。そのため、従来のカースト制を大きく変えていく可能性がある点にも注目したい。